



■ 第5回 SPARC Japan セミナー 2013

「アジアを吹き抜けるオープンアクセスの風ー過去、現在、未来ー」

2014年2月7日(金) 国立情報学研究所 12階会議室 参加者:77名

オープンアクセスに関する議論は、ともすれば欧米が中心となりがちでした。これまでの SPARC Japan セミナーにおいても、アジアが主題として取り上げられたのは 2008 年 7 月に行われた「韓国コンソーシアム事情」の一回限りであり、2009 年度以降、日本以外のアジア地域を活動拠点とするスピーカーが登場したことは一度もありませんでした。

日本でもすでに、海外との情報共有、海外への情報発信などが取り組まれているところです。さらに今後は、アジア地域との情報共有を進めていくこと、連携の可能性を探っていくことが必要ではないか。そうした視点から、今回のセミナーでは、SPARC Japan セミナー初の試みとして、アジア諸国から複数のスピーカーを招聘し、アジア地域のオープンアクセスの進捗状況に関して情報を共有するとともに、今後の連携の可能性を探ることを目指すことにしました。

今回のセミナーでは、韓国、中国、東南アジアの個別の状況、そしてアジア全域についての概況と展望について情報共有がなされました。まずは顔と顔を合わせてお互いの状況を知ることから、情報共有や連携協力の道筋ができていくのではないかと感じさせるものでした。

セミナーの概要は以下のとおりです。当日の配付資料、ドキュメントなど詳細は SPARC Japan のウェブサイトをご覧ください。(http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20140207.html)

講演

Institutional self-archiving に関して、この10年間してきたこと、見聞きしたこと

杉田 茂樹(千葉大学附属図書館)

今から10年前、大学の教員にOAを紹介したところ、「電子ジャーナルってお金かかっているの?」と聞かれた経験がある。それから10年間、OAとその背景を理解してもらうため研究者との対話を続け、セルフアーカイビングの促進に努めてきた。現在、日本では400ほどの大学が機関リポジトリを設置しており、約126万件の文献が搭載されている。大学間で様々な情報共有を行いながら、学び合ってきた。しかしまだ、研究者が日々生み出す論文のすべてが掲載されているわけではなく、やるべきことは多い。アジア各国の状況を伺い、今後の活動に役立てていきたい。

OA Activities in Korea

Choi Honam

(Korea Institute of Science and Technology Information*)

韓国のゴールド OA

韓国では医学系分野が OA をリードしており、

KoreaMed や Synapse といったサービスが提供されている。自然科学系分野でも OA が進み、K-Pubs は出版のすべてのサイクルを統合グローバルに発信できるプラットフォームだ。一方、人文社会科学系分野では、研究助成機関の NRF**が関心を高めているものの、OA への理解や関心は相対的に低い。

公的資金の助成を受けた研究成果を読むために購読料を負担しなくてはならないことが韓国では不満を集めている。こうした研究成果への自由なアクセスを求める立法への動きが高まったが、関係者の消極的な態度で成立しなかった。ただし KNIH***の助成を受けた論文は OA とするよう保健福祉省が義務付けている。

韓国のグリーン OA

機関リポジトリのほとんどは国レベルの援助を受けており、KISTI や KERIS****などが分担してサポートしている。KERIS が直接設置したものは OAI-PMH(データの自動収集によってメタデータを交換するためのプ



ロトコル)に準拠しているものの、他の多くは準拠していない。

また機関リポジトリの他に、

* Korea Institute of Science and Technology Information: KISTI

** National Research Foundation of Korea: NRF

*** Korea National Institute of Health: KNIH

**** Korea Education and Research Information Service: KERIS

NRF の援助を受けた分野別リポジトリや、KISTI が構築し、5つの機関が参加している P-cube という学術データのリポジトリがある。

国内外での連携協力

国際的には SCOAP³ *や WPRIM**などに参加、国内では文化・スポーツ・観光省をはじめとする中央省庁や研究助成機関との協力を進めている。

結論

ゴールドOAの課題は、全体的なOAへの理解の低さ、図書館は理解しているが財政面やトップマネジメントの理解の低さなどによって行動できないこと、ステークホルダーの対立など構造的なものなどである。

グリーンOAに関しては、OAの義務化がまだほとんどされていないこと、OAI-PMHに準拠していないことなどが課題だ。また Open Government Data の課題としては、著作権や知的財産権について結論がはっきりと出ていないことがある。

今後の韓国でOAを牽引するのはKISTIなどの国レベルのセンターであり、医学系分野だろう。コミュニケーション、コラボレーションを進めていきたい。

OA & IR in 2012: The University of Hong Kong & Greater China

David Palmer (The University of Hong Kong Libraries)

Knowledge Exchange 構想

香港大学の機関リポジトリ HKU Scholars HUB は2005年に立ち上がったが、2009年に新たな取り組みとして Knowledge Exchange が始まり、機関リポジトリへの予算と関心が増大した。Knowledge Exchange の目的は、大学とコミュニティの「互恵」である。

背景として香港8大学が推進する Knowledge Transfer 構想があった。大学は、教育、研究に加えて、知識転化を行っていくことが求められている。香港大学は名称を Knowledge Exchange と変え、それを根拠としてOAを推進している。

香港大学 Office of Knowledge Exchange の活動

香港大学図書館では、Institutional Repository ではなく Current Research Information System (CRIS) という名称に変更し、大学の戦略構想に位置づけた上で、あらゆる研究情報を収集、研究業績管理を進めていき、予算配分に役立てられるようにしている。

Office of Knowledge Exchange では他に、OA出版やORCID***などのプロジェクトを支援している。

また香港大学では、2000年に学位論文のリポジトリ掲載を義務化した。2010年には図書館でOAポリシーを、2011年には知的財産権に関するポリシーを打ち出しているが、教授陣は無視している。そこで次のプランは、OA論文をリポジトリに掲載すること自体を評価することである。学長交代もあり、今後に期待できるところだ。

中国全土の状況

香港では8大学すべて機関リポジトリを構築しており、HKIR****というポータルサイトを提供している。台湾でも機関リポジトリは盛んで、131の機関リポジトリがある。義務化はしていない。中国本土では、北京大学が主導する機関リポジトリ機構 CHAIR や、中国科学院国家科学図書館による熱心な推進活動がある。2013年9月のOAウィークでは雲南省で中国IRカンファレンスを実施した。



Open Access in Southeast Asia: Unresolved Issues and New Opportunities

Paul Kratoska (NUS Press, National University of Singapore)

東南アジアではOAは確立されていないという前提に立つが、なぜOAに対する関心が低いのか？ もし東南アジアでOAがうまくいったら、どうなるだろうか？

基本的な情報

東南アジアには900から1000の大学があり、うち40大学ほどが研究大学とされている。東南アジアにおける研究の多くが中央政府からの資金援助を受けており、成果を明確に提示しなければいけない。東南アジアでは、評価の高い雑誌に掲載されていれば研究の価値も高いとみなされ、そうした雑誌に掲載されることが重要視されている。東南アジアにとってOAにすることはどのようなメリットがあるのかということを考える必要がある。

未解決の問題

• Article Processing Charge (APC、論文加工料)の問題: 研究助成金でAPCを払えるようにできるか。助成者はどの雑誌なら認めるのか。意思決定者はその分野の専門家ではないから、判断基準は難しい。APCをとることだけが目的となっているような”Predatory Journals”の問題もある。

• 研究の所有権の問題: 企業で行われた研究成果は企

* 高エネルギー物理学分野の査読付きジャーナル論文のオープンアクセス化の実現を目的とした国際連携プロジェクト

** Western Pacific Region Index Medicus: WPRIM

*** Open Researcher and Contributor ID: ORCID (世界中の研究者に対して一意な識別子を与えることを目指す国際的組織)

**** Hong Kong Institutional Repositories: HKIR

業に帰属するが、東南アジアでは、大学でも同様の方針をとることが多くなってきた。リポジトリに掲載するには権利主体がはっきりしていないと難しい。

・人社系分野での OA 義務化についての問題: 人社系では複数プロジェクトから成果を集めて出版したり、論文が長かったりするなど、OA 化に難しさがある。現在の APC の相場ではコストをカバーできない恐れもある。

東南アジアの研究者は英語での発信に慣れていない人も多く、研究活動自体活発でない分野も多いので、OA のメリットが享受されるとはかぎらない。大学としてはメリットがあるかもしれない。

OA と東南アジアの学術出版の SWOT 分析

SWOT 分析(強み・弱み・機会・脅威についての現状分析)を試みよう。特に機会。より多くの人アクセスできるようになることが研究上のようなメリットがあるのか。アジアの OA 出版は非西洋型パラダイムを開拓できるだろうか。東南アジアの大学では雑誌出版の助成をしているが、それにより APC を求めない OA 出版が実現できるのではないか。

アジア地域での協力が必要だと考えている。NUS Press は各国の大学出版会と個別に協力関係にあるが、もっと東南アジア域内協力が進められないだろうか。



「アジア」の OA の将来

土屋 俊(大学評価・学位授与機構)

前提として、以下の3点を述べておく。1. OA はよいことだ。2. OA のビジネスモデルに関する議論はあったが、なんとかなる。3. OA が出てきて十数年が経ち、雑誌の価格に影響しないこともわかった。

結論は、アジアは科学技術生産力が增大しており、それゆえ論文出版も増える。大学図書館の予算がこれらからどんどん増えるとは考え難い。論文が増えることに対して、その出版を誰がまかなうのかという問題が出てくる。

OA でやるしかない、ということだ。購読料をまかなうためのお金がもうない。ない以上は払えない。お金は払えないけれど出版したい。じゃあ自分で払う。それ以上の結論は出てこないのではないかな。



アジアの主要8国の研究開発予算はアメリカを越えているという報道がある。それにともない論文

数も増えている。ではその増えたものはどうするか。これは研究者と大学が考える問題だ。いまや、アジア地域内での OA の可能なモデルをいかに作るか、ということに問題は移っている。ひとつは、predatory でもなんでもいから OA 雑誌にどんどん投稿するようにすることだ。もうひとつは、日本の J-STAGE というプラットフォーム、ここをアジアの方に使ってもらおうということもあり得る。図書館に唯一できることは、機関リポジトリを「出版プラットフォーム」として再定義することだ。再定義したあと、図書館の仕事としては手放すもよし、手放さざるもよしであるが、そもそも誰がどう運営するかを大学ごと、大学図書館ごとにゼロから考えてもらえないか。

パネルディスカッション

モデレーター: 加藤信哉(筑波大学附属図書館)

パネリスト: Choi Honam / David Palmer / Paul Kratoska / 土屋 俊 / 尾城 孝一

はじめに尾城孝一氏からのプレゼンテーションが行われ、次にディスカッションが行われた。

日本の機関リポジトリ これからの10年を考える

尾城 孝一(国立情報学研究所)

日本の機関リポジトリ数は公開予定を含めると 487 機関。アメリカを越え、世界一位になる。

この間の反省点としては、「図書館」リポジトリにとどまってしまったこと。グリーン OA が進まなかったこと。ポリシーが弱いこと。文献リポジトリ(紀要論文リポジトリ)にとどまってしまったこと。CSI 委託事業の成果が展開・普及できていないこと。

ここで改めて機関リポジトリの定義、意義について確認したい。古典的定義では「大学とその構成員が創造したデジタル資料の管理や発信を行うために、大学がそのコミュニティの構成員に提供する一連のサービス」(Clifford Lynch, 2003)。これまで図書館を介して情報がアクセスされてきたが、情報がデジタル化されると、図書館を介さずにアクセスできるというモデルが成立してし

まう。そこで、学内で生み出された教育研究の成果を集めて組織化、コレクションして発信するというこれまでの逆の流れが産み出された。

2013年の10月から、大学図書館とNIIの連携協力の枠組みの中で「機関リポジトリ推進委員会」が立ち上がった。機関リポジトリ推進委員会では「大学の知の発信システムの構築に向けて(戦略的重点課題)」(通称「竹橋宣言」)としてポリシー、システム基盤、コンテンツ、人の4点を取り上げ、推進していこうとしている。

機関リポジトリをもっと教員の身近におくこと、教育や研究のワークフローの上に、研究者の動線の上に位置付けるシステムが必要だろう。それによってクリフォード・リンチの定義が実現されるのではないか。

そして、アジアの国々との連携については、これまでの日本の経験や知見をアジアの国々に広めていくことが責務ではないか。たとえば最近、マレーシアのワササン大学でWEKOを使用してシステムをつくるプロジェクトが始まっている。こうした活動を積み重ね、機関リポジトリを通じたOAを広めていければよいと思う。

ディスカッション



言語の問題

Kratoska氏から、OA化に際して言語による違いを埋めていくための橋渡しはこうしたらよいか、という問題提起があった。Palmer氏からは、Google翻訳などの機械翻訳を使えばよいし、英語で出版するように各国で言っているとの指摘があった。Kratoska氏は、英語での出版を強要することが二層化を進めてしまいかねないという危険性を示唆し、東南アジアでも英語で教育されている国であれば論文出版が容易だが、それ以外の国では難しいことが述べられた。これに関してChoi氏からは、データベース搭載の文献をオンデマンドで翻訳してもらえという翻訳プロジェクトの紹介があった。

APCの問題

Kratoska氏から、OAになると図書館が支払う金額は少なくなるのかどうかという問題について、Duke大学の調査結果では実はジャーナル購読料よりも高くつくという結果があることが紹介され、大学全体で支払うコスト

は今までより高くなる可能性があることが指摘された。

セミナー参加者のリポジトリ経験

会場内に対して、「ここにいる何人が機関リポジトリで論文を読んだことがあるか」「ここにいる何人が機関リポジトリに論文を登録したことがあるか」と問いかけたところ、会場内のほとんどが機関リポジトリで論文を読んだことがあり、また、会場内で論文執筆経験がある人のほとんどはリポジトリに論文を登録したことがあることがわかった。

OAの推進力

Palmer氏から、成功例としてNIH*のPubMed Centralが挙げられた。搭載率は80%を越え、その成功の秘訣は搭載しない場合は助成金が与えられないという仕組みにしたからであるとの説明があった。これに対して土屋氏からは、実際に搭載しているのは研究者自身ではなく出版者が行っているなど、その仕組みだからうまくいっているというのはひとつの「神話」ではないかという指摘があった。

Kratoska氏からは、研究者を説得することは不可能であると考えた方がよく、大学の管理者や研究助成機関が要件としてセルフアーカイブを求めるといふことに尽きる、との発言があった。土屋氏からはそれに対して、研究者としてはそれに反対で、そのような強制のもとにおかれるということは健全な研究推進とは言えないのではないかと意見が述べられた。

さらに、Choi氏からは、韓国のKAIST**で機関リポジトリと業績管理システムをリンクさせた事例のようにトップが機関リポジトリ推進の意思がないとうまくいかないのではないかと意見が述べられた。

Kratoska氏からは、ノーベル賞をとったある研究者が、「自分が今若い研究者であったらこのような成果は挙げられなかっただろう」(今の若い研究者は出版に追われていて、一生かかるような研究はできないだろう)と述べたことが紹介された。

モデレーターの加藤氏から、トップダウンで政策的にやるのがよいという主張と、研究というのはそんなものではないという主張、北風と太陽のような二つの主張であるとの感想が述べられた。

これからのアジアでの協力関係

Choi氏からは、OAについてはまずコンセンサスが必要であり、そして、やっつけよう、という意味が必要であるが、最初は政府が法律などである程度のレベル(クリティカルマス)に達するまで強く推進することが必要とのコメントがあった。

* National Institutes of Health: NIH

** Korea Advanced Institute of Science and Technology: KAIST

Kratoska 氏からは、大学出版局と他の出版社との協力を提案する際、何度も同じ出版社を訪ねてお互いによく知りあっていき、そしてはじめて、では何か一緒にやりましょう、ということになる。地域として何かをやっているということなら、お互いをまずよく知り、そして大きな方

-----参加者から-----

(大学／図書館関係)

“各国の OA の現状、ポリシーがわかって有意義でした。ひとくちにアジアといっても様々にある。共通する点と差異が面白かったです。中国本土が規模的に気になる。”
“アジアのリポジトリ、OA の現状をお聞きでき勉強になりました。発展するアジアの国との共同研究、留学生の研究などもあり、OA が広がっていくことを願いたいと思います。まずは自分の役目をこなしていくことが大切だと思います。”

“焦点がより絞られているとよかったです、得られた情報はそれぞれ有益だったと思います。”

(大学／図書館関係／教育関係／研究者)

“クラトスカさんの最後のコメントにあったように、アジア

針というよりも小さな協力を積み重ねていくことが大事だというコメントがあった。そして、そのような小さなステップのひとつが、今日のこのセッションではないか、としてのセミナーに対する感謝の意が表された。

以上をもってパネルディスカッションが終了した。

における協力体制を実現するには、たがいに知り合う機会をつみかさねていくことが大切だと思う。”

(企業／学術誌編集関係)

“セミナー全体を通したコンセプトや目標が不明瞭だった。機関リポジトリと OA の関係性が不明瞭だった。まだ明確でないためにそうなったのかもしれないが。全体のオーガナイズでもう少し改善できたのでは。ディスカッションでも、何についてディスカッションしたいのか目標がよくわからなかった。”

(大学／研究者)

“末尾に尾城さんからもお話ありましたが、再びアジアの方々をお招きして、今度はトピックを絞って何かあれば。”

-----企画後記-----

😊 今回の企画では、韓国・香港・シンガポールの三カ国から、政府機関研究者、大学図書館関係者、大学出版会担当者とそれぞれ違う立場の方にご登壇頂き、各国・地域における現状をそれぞれの立場から論じて頂く盛りだくさんの企画となった。香港・シンガポールは、英語によるアジアに関する学術情報発信のハブでもあるので、今後日本を、そして東アジアを越えた連携を考える上では、重要な場所となるだろう。ご参加頂いた皆さまに、アジアの多様性を面白いと思って頂けるセミナーとなっていれば、企画側としては幸いである。

北村 由美 (司会・京都大学附属図書館研究開発室)

😊 アジアのオープンアクセスというテーマで企画するのはなかなか難しい。まず、オープンアクセスと言っても実に多様であるし、アジアも多数の国を含み、ひとまとめに論じることはやや無理がある。その中で、選んだ国のそれぞれの実情についてお話を頂くことになったが、それ

はそのまま、各国の多様性を反映した内容となった。強いて焦点を当てると、客観的な状況からは乖離があることにもなる。その意味で、これが、アジア(の幾つかの国)の実情であることが伝わったならば、この企画の目的はおおむね達したものと思いたい。また、機会があれば、今度はテーマを更に限定して、アジアの図書館や情報専門家と情報共有できたらと考える。

内島 秀樹(筑波大学附属図書館)

😊 このニュースレターをまとめるにあたって改めてセミナーを振り返ると、異なる立場からの豊富な事例紹介、各国の大学事情や研究事情など、興味深いセミナーであったように感じられる。まずはお互いを知りあうこと、そして小さなステップを通じて協力を積み重ねていくことという Kratoska さんのコメントが印象に残った。

松原 恵(東京大学情報システム部)

SPARC Japan 事務局より SPARC Japan は今年度から第 4 期に入り、「国際連携の下でのオープンアクセスの推進、学術情報流通の促進および情報発信力の強化」に取り組むことを基本方針に、大学図書館と研究者の連携を促進し、オープンアクセスの諸課題に対応するための調査活動やセミナー活動を行っています。本ニュースレター紙上で、調査の成果や最新の海外動向を伝えてまいります。また、OA Week の 10 月 21～22 日にオープンアクセスサミット 2014 の開催を予定しています。(SPARC Japan 事務局 高橋菜奈子)